居場所とウェルビーイング　第9回

令和の課題は「包摂的な多様性」実現 居場所はそのための社会の土台となる

全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長　湯浅　誠

昭和は遠くなりにけり――。話題になったテレビドラマ「不適切にもほどがある！」（2024年放送）で、主人公の中学校教師は、昭和から令和にタイムトラベルし、自分にとっての常識が非常識とされるあべこべの世界を体験する。顧問をしていた野球部では、練習中の水分補給は禁止、誰かがミスをすれば部員全員がケツバットを食らう。学校内の休憩室やバスの中でたばこを吸い、女性の容姿を揶揄（やゆ）し、「登校拒否」は対処されず、いじめは被害者にも問題があると校長が公言する。それらすべてが、令和では不適切とされていた。

最大の変化はマイノリティーに対する視線

主人公が行き来する２つの時代に挟まれた平成の30年が、昭和と令和を「あべこべの世界」に見せるような変化を生み出した。平成という時代を特徴づけるキーワードの一つが「多様性」だ。最初に表れたのは働き方の多様性だった。「フリーター」という言葉が生まれ「ハケン」が広がった。内実は非正規雇用の拡大だったとも言えるが、ライフコースやライフスタイルの多様化を伴っていたことも確かだ。消費性向も変化し、大量生産から少量多品種化、さらにはコト消費へと変遷した。

なかでも最大の変化は「マイノリティー」に対する視線の変化となって表れた。女性、高齢者、障害者、困窮者、LGBTQ（性的少数者）、不登校、いじめ、虐待、犯罪被害者などさまざまなマイノリティーが「不当に差別されるべきでない者たち」と認識され、ありのままを受け入れ、あたり前の権利を保障することが求められた。

もちろん、変化は人口ボーナス期からオーナス（重荷）期への転換という社会的要因、バブル崩壊という経済的要因、またときどきの政治動向にも影響される複雑なものであり、直線的でも単線的でもなかった。俯瞰（ふかん）的に言えば、平成前期はまだ昭和の雰囲気を色濃く残し、しばしば多様性を否定・否認した時期、平成後期は多様性の受容へと切り替わっていった時期と言えるだろう。

変化の軌跡はジグザグだし蛇行するが、少なくとも保守的家族観を堅持していた安倍晋三首相が、19年（令和元年）の所信表明演説で「みんなちがって、みんないい」と多様性を称揚するに至るくらいには不可逆的な変化だった。だがそれでバラ色の未来が到来したわけではない。「一人ひとりは真四角なんかじゃなく、それぞれ凸凹のあるジグソーパズルのピースみたいなもので、あんたも私もそうなんだから、多様性は認めないといけない」というのが平成の「成果」としたら、「認めないといけないのはわかったけれど、居心地悪い」というのが平成の「限界」「課題」だった。

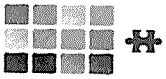
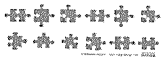
「多様性」は認められたが「包摂」ではない

多様性を認めることに対する居心地の悪さは、恒常的には仲間内のコミュニティへの閉じこもりを促し（分断と細分化）、間欠的に相互の対立を噴出させる（トランプ現象から「＃子持ち様」批

ゆあさ・まこと　1969年生まれ。東京大学在籍中にホームレス支援を始め、2009年から通算３年間内閣府参与。14-19年まで法政大教授。18年に全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長に就任。19年から東大特任教授。社会活動家。

禁複製・無断転載

表　昭和・平成・令和の時代を対比する（社会の展望とこども食堂）

昭和～平成前期	平成前期～後期	平成後期～令和
「きちんと整列できる美しさが大事」というマスゲーム的価値観。働き方においては、個々の人生事情は会社の正門で捨てる。「若くて健康で、正規で働く日本人男性」が規範。**いわばみんな真四角**の顔をしている。凸凹のあるピースは雇用でも社会的にも弾かれる（**排除**）	少子高齢化と人口減、低成長と財政難が効き始める。昭和モデル崩壊の否認から受容へ。「みんなちがって、みんないい」。女性、障害者、LGBT…。働き方改革に支え合いの地域づくり。ただし**棲み分け（Non-Inclusive）**。ゆえに棲み分けられない場では過酷（スクールカースト、外国人集住団地、家族、職場、#子持ち様）	「真四角の顔をしなくても、時間と空間を共有できるか」。その接合の**仕方・工夫**が時代のテーマ（外国人嫌悪型ナショナリズムの克服等）。共生・共存の危機にさらされ、可能性を探求する（戦争・内戦・分断と共生・シェアが**同居し、綱引き**する時代）
成長	成長→成熟	成熟
稼ぎと勝ち負け		暮らしと共感
高度経済成長	リーマンショックと東日本大震災	こども食堂/多世代交流
Uniformity（均一）	Diversity（Non-Inclusive）	Inclusive Diversity
 凸凹のピースはいらだちを生み、排除を生む	 「みんな凸凹」で結構だが、つながると摩擦とあつれきをもたらす	人と人のつながりを実感できる場。居場所によるInclusion

Diversity：存在の問題、Inclusion：意思と工夫の問題
出所：筆者作成

判まで）。距離があって棲み分けられている分には容認できるが、近くにいて棲み分けられないとトラブルに発展する。外国人留学生がコンビニエンスストアのカウンターの向こうでレジを打っていてくれる分には「がんばってね」と思えるが、隣に住むのは「かなわん」となる、そんな感じだ。

ダイバーシティ（多様性）は分断や細分化と親和性が高く、面倒くさい。そこで必要とされるのがインクルージョン（包摂）だ。両者はセットで語られるが緊張関係にある。加えて両者は次元の異なる概念でもある。ダイバーシティが問うのは存在・アイデンティティーとそれへの認知だ。私が子育て中の女性であること、障害者であること、生物学的性に違和感を抱いていることをそのものとして認知してほしい、となる。対してインクルージョンが問うのは意思と工夫だ。一つひとつ異なるピースをどのように共同・共存・共生させられるのか、そのための配慮と行動を求めている。

それゆえ平成の「限界」「課題」は、多様性は認められたが包摂的ではないこと（Non-Inclusive Diversity）と言い換えられる。つまり令和の時代的課題は包摂的な多様性を実現することだ。そして、居場所とは人々の共同・共存・共生を可能にする場のことであり、居場所づくりとはそのような場を創出しようとする試みだ。前回の連載で「しがらみ」と「つながり」の社会史として位置づけた居場所／居場所づくりの意義は、「多様性」と「包摂」の社会史としても位置付けられる。

相手との間合いをはかり共生の作法を学ぶ

3つの時代を対比すれば表のようになる。右下のイラストが居場所による包摂のイメージだ。一つひとつのピースはぴったりとははまっておらず、隙間がある。多様なピースがぴったりとはまるような「理想郷」はない。しかしそれでもピースは四角い枠の中で共存している。その枠が居場所だ。

地域にも社会にもさまざまな人が暮らし、なかにはソリの合わない人間もいる。学校も職場も家庭だってそうかもしれない。メンバー全員がぴったりとはまるなどということはありえない。それでも私たちは、さまざまな相手との間合いをはかりながら、共生の作法を学んでいる。学年や学校が違うこどもと遊び、親や先生と違うタイプの大人と出会い、会社や職種の違う人たちと話し、子育て中の保護者がかつての子育て経験者と話す。

各種の居場所はインクルージョンを可能にする社会の土台となり、基礎をつくる。多様性の良い面を生かすためには、違いを乗り越えてつながる意思と多様なつながり方の引き出し（工夫）が必要で、それは各種の居場所を通じて身につけていくべきものだ。分断と細分化に押し流されかねない今だからこそ、人々は居場所をつくり、つながりの中でそれを乗り越えようとしている。居場所が求められる背景には時代の要請もあるのだ。G

禁複製・無断転載

日経グローカル

編集・発行　日本経済新聞社
発行人　田口正則　編集長　浅山　章
〒100－8066　東京都千代田区大手町1－3－7
http://www.nikkei.co.jp/rim/glweb/
ISSN　1349－4880 © 2024

■編集部へのご連絡は
TEL 03－6256－2313　FAX 03－6256－2980
e－mail chiiki@nex.nikkei.co.jp

■ご購読のお問い合わせは
日経BPマーケティング読者サービスセンター
（営業時間は平日9：00～17：00）
TEL 03－5696－1124　FAX 03－5696－1150

■記事のコピー・転載などに関するお問い合わせは
日本経済新聞社　記事利用担当
TEL 03－5696－8531

毎月第1、3月曜日発行
購読料金1年（24冊）　92,400円　本体84,000円
定価1冊　4,400円　本体4,000円

日経グローカルをコピー等で複製することは、社内用、社外用を問わず日本経済新聞社の許諾なしにはできません。無断複製は損害賠償、著作権法上の罰則の対象となります。